【社会科】教科提案

一人一人の学びの充実をめざして
～　ひとり学習を全体学習の場面へ　～

1．研究テーマ設定の理由

（1）学校提案とかかわって

「学びをデザインする子どもたち」とは，主体的に学びを深めていき，社会科のねらいに自ら近づいていける子どもたちのことである。これは，土台となる学級風土の中で育まれていくものである。

まず，単元の中でめざす子どもたちの姿とは，見通しをもって学習に取り組んだり，課題を見いだして追究したりしていく姿である。そのためには，魅力的な教材づくりや課題設定が必要である。単元や課題を工夫することで，子どもたちが学ぶ筋道を考えようとするきっかけをつくっていくのである。そうすることで課題解決意識が高まり，ひとり学習が深まると同時に課題に向かう学級風土も高まっていくのである。社会科の学習内容は，主として現代社会の事象を取り上げるため，より具体的・直接的に現代社会とかかわり合う。事象を単に知識として獲得するだけではなく「ひと・もの・こと」という具体的な対象とかかわらせる中で認識され，それを追究していく過程を通して深化させていくのである。自ら追究する中で獲得していった知識は，単に知識の増加にとどまらない。知識を獲得するための道筋や学び方をも体得するはずである。そのために，教師は一人一人の子どもによりそいながら，学習意欲やそれぞれの課題意識を高めていく支援が重要となる。例えば「子どもたちは，今どんなことに興味・関心をもち，追究しようとしているのか」とか「この子はこの問題をどうとらえどのように対象に向き合うだろうか」という視点が必要となってくる。子どもたちは，その追究の過程を通じて知識・理解を獲得し，よりよく課題を解決する方法や能力を身につけていくのである。

単元全体を通して，その個の変容を探っていくためには1時間1時間の授業についてもその学びを丁寧にみていく必要がある。ここで大切にしたいことは，子どもの気づきを見逃さないようにすることである。そして，いくつかの気づきから子どもたちによる焦点化を支援し，課題解決へと向かわせたい。どの場面においても「学びをデザインする」ということは，教師のみとりと支援が重要である。教師は学習意欲を刺激し，方向づけ，学習活動を支援する存在でなければならない。

（2）社会科でめざす子ども像

社会科の究極的な目標は，社会生活を営んでいくために必要とされる「公民的資質の基礎を養う」ことである。一人の人間として社会に対してどうかかわり，社会生活の中で自分はどう生きていくかを考え，社会の中で望ましい行動がとれるようにすることである。これは子どもたちに自分なりの「社会的なものの見方や考え方」を育てることと関連している。したがって社会科学習では，「社会的なものの見方や考え方」を身につけるようにするために，社会的事象に主体的にかかわらせていくことが大切である。

そこで，「社会科教育を通してめざすべき子どもの姿」を，次のように設定した。

A：事実を的確にとらえ，こだわりをもちながら学習をすすめていける子
B：社会的事象への公正な判断力を持ち，未来への生き方につなげられる子

Aの「事実を的確にとらえ」とは，事実に基づいて見たり考えたりすることである。様々な社会的事象から具体的な事実を的確に読み取ることが大切である。子どもがもっている社会的事象に対する見方や考え方は多様であり，それは，既習内容の理解や生活体験の差異に由来する。「こだわりをもちながら学習をすすめる」とは，社会的事象に対して疑問を抱くことも含め，自分なりに解釈（意味づけ）して考察することである。新たな社会

的事象と出合ったときに，他者の考えと自分の考えを比較したり，共感，深化したりする場を全体学習ととらえている。全体学習の中で，一人一人が友だちとかかわりながら，自分の思いやこだわりをもって学習をすすめることにより，社会的事象をより総合的に把握したり考察したりすることができると考える。

Bの「社会的事象への公正な判断力をもち」とは，社会的事象を一面的に理解するにとどまらず，多角的・多面的にとらえることで，事象や課題を公正かつ総合的に判断する力を育むことである。社会的事象の多くは，立場を変えて見れば当然異なる見解が生じるものであり，多角的・多面的にとらえることで，より広い視野から考察・判断でき，子どもの中に個性的な見方や考え方が育っていく。また，自分の見方や考え方を表現し合い，友だちと比較・交流することによって，より公正かつ総合的なものの見方ができるようになる。「未来への生き方につなげられる子」とは，自分が生活している社会に深い関心や愛着をもち，それをもとに自分なりの未来の生き方を描き出すことである。社会的事象を自分の生活や自分自身とのかかわりの中で見たり考えたりすることで，自分の考えや夢をより広げ，自分なりの生き方や生活の改善につなげていけるのである。そして“自分にとっては”“自分ならば”など，自分を社会とのかかわりの中で見つめ直し，未来への生き方につなげていくことができる子に育ってほしいと願っている。

2. 社会科学習における「学びをデザインする子どもたち」

社会科学習の具体的なねらいは，子ども自らが問題意識をもって意欲的に学ぶ態度をはじめ，自分なりに思考し判断しながら問題を解決する力や自分の言葉で表現する力，学習の成果を自らの生活向上に生かす力などを身につけさせることである。社会的事象を単なる知識として理解するだけでなく，社会的事象を多角的・多面的にとらえることで総合的に判断することが重要である。

このようなねらいを達成し，社会科学習を一層意義深いものにしていくために，全体学習と同様にひとり学習を大切にしたいと考えている。全体学習は考えをすり合わせ練り合う場であり，ひとり学習を発展させる場でもある。全体学習はひとり学習のために，ひとり学習は全体学習のために相互に関連しあいながら位置づけられるのである。「ぼくは○○だと思う。」「わたしは，○○についてこんな疑問をもっている。」というように，学習対象に対して個人の思いをしっかりもつことから，ひとり学習がスタートする。学習対象と出合い，子どもたちは様々な疑問をもちながら追究活動をすすめるが，このとき指導者は，誰がどんな事を調べ，どのように資料作りをしているのかを確実に把握しておくことが大切である。また，自分の疑問を解決できない子に対し，調べ方や考え方を助言することもある。ひとり学習をすすめ，深めることで，地図やグラフなどの具体的資料を効果的に活用し，地域社会の社会的事象の特色や関連などについて考える力，調べたことを自分なりに表現する力を伸長させることにもつながると考えている。

社会科では，特に1時間の学習の中で「学びをデザインする子どもたち」の姿を提案していきたい。全体学習で話し合いが始まると，いろいろな考えが出てくる。友だちの考えをしっかりと聴き，自らの思いを出し合う中で，「なるほど，そんな見方や考え方があるんだね。」と友だちの考えに共感することや，「ぼくと○○さんとは考えがちがうようだから，◇◇を用意して，もう一度ぼくの意見を言い直してみよう。」というように，学習対象に対する自分の考えを見つめなおすきっかけになり，新たなひとり学習の課題が設定されることが多い。このように子どもたちで“相互の刺激”をし合い，友だちの考えを知る中で自分の考えを一層深めることは，社会的事象や課題を公正かつ総合的に判断する力を育てる上でも大切である。また，友だちの知識や考えを比べたり・つなげたり・まとめたりすることで，考えや思いを再構成し，具体的な事実に対する理解が深まるのである。

（1） 社会科における「つなぐ・つむぐ・つくる」みとりと支援

社会科における着目児とは単元を見通して設定する。単元で変容を期待する子，単元とかかわりの深い子，学びをデザインしていく子などが考えられる。単元を進めていく中で，着目児の変容を追いながら，子どもたちが「ひと・もの・こと」とどう関わっていくかをみとっていく。課題に対して着目児のアプローチの仕方をみとることによって，子どもたちがより学びをデザインできるよう支援していく。 そのために作文や座席表，カルテ，授業

記録などで個の学びをみとり，支援していく必要がある。

「つなぐ・つむぐ・つくる」みとりと支援についても１時間の授業における「つむぐ」に焦点をあて研究していきたい。学級全体で課題解決へと近づけていくために教師は子どもの考えを把握する。子どもたちの考えを把握し，整理しながら，どの子の考えをとりあげれば学びが深まるのかといったみとりの視点をもち，子どもたちが視点を絞った話し合いができるよう個に応じた支援を大切にしていきたい。

（2）社会科における子どもたちが学びをデザインする姿

	３年	４年	５年	６年
課題解決	教師と共に単元全体の見通しをもって学ぶ	社会的事象から課題を見いだして追究する	社会的事象について広い視野から課題を見いだして追究する	社会的事象について広い視野から課題を見いだして追究し自分の生き方を考える
対話	友だちの考えにかかわり，違いや同じところがわかり，新たな考えをうみだす	多様な考えに進んでかかわり，他者とともに新たな考えをうみだす	多様な考えに進んでかかわり，三位一体の対話で自己の変容に気づく	多様な考えに進んでかかわり，三位一体の対話で自己の変容に気づく
学び方	学び方を学び，社会事象について必要なことを集め，表現する	社会的事象を的確に観察，調査し，目的に応じて読み取ったり，まとめたりする	具体的な観察ばかりでなく間接的な資料をもとに，社会的事象を的確に観察，調査し目的に応じて活用する	間接的な資料を理解し，社会的事象を的確に観察，調査し目的に応じて活用する

（表１　子どもたちが学びをデザインする姿）

（3）３年生「くらしを守る仕事」から

課題「附属小学校がひなん所になるって聞いたよ。みんなは安心？心配？」（一部授業記録を抜粋）

かりん：心配って言っている子多いけど，そんなに言っても，総合防災課のＡさんは「避難場所になるようです」っていっていたから，心配なところを安心に変えることを考えなくちゃいけないと思いませんか？（C：うん，賛成）（C：でも・・・）　口々に話す

たかし：附属の近くは避難訓練してなくて心配なんだから，附属の周りもぼくの地域の磯の浦みたいに避難訓練のイベントをやったら，心配が安心に変わる。

ゆみか：続けて，串本幼稚園のように毎日避難訓練したり，みんなでダンゴムシのポーズも朝の会に練習したりしたら地震が来てもすぐ頭を守れて安心でいいと思う。

たつや：片男波も地域で避難訓練しているけど，地域の運動会でも，担架でリレーして防災のためにがんばっている。この地図も見てほしいんやけど，要介護者と協力者がわかりやすく色分けしていて，お年寄りのところにすぐ助けに行けるシステムにしてる。

かずや：ぼくは，心配から安心に変えられることないと思っていたけど，みんなの話聞いてて，なんか安心になってきたっていうか，安心にしていこうと思ってきた。だから，さっきおく山のがけ崩れとか心配っていうたやろ？でも，おく山があぶないって近くのところにいっぱいはったらみんな気を付けると思うんよ。湯浅にいったとき，電柱に小学生の書いた防災のポスターあったやん？（C：うん）あんなみたいにポスター作ったら心配が安心に変わると思うんよ。

けんと：さっきもぼくが言うたんやけど，例えば，（黒板を指さして）こんなん（ポスター）とかこんなん（勉強）とかは自分でできるやろ？自助やと思います。そして，こんなん（避難訓練）とかは共助やと思うし，こんなん（備蓄を増やす・液状化）は公助でやってもらわなあかんから自分たちでできることから安心を心配に変えたらいいと思います。

（C：よびかけも）（C：だんごむしのポーズもできる）（C：そうやなあ・・いいなあ）

この後にも，数人の子どもが友だちの意見を聞き，考えを深めたり変えたりした。このように，他者の意見に触れ自己の考えを更新・変容し学びをデザインする子どもたちの姿が本時の中で見られた。また，本単元以降もニュースや新聞記事で意欲的にその変化や対応について話し合っていた。子どもたちは，多くの人に防災を伝えたいという思いで，地域と人とともに学びを深めた。特に家の人や地域の人の意識を変えたいという「使命感」をもったことがきっかけとなり，地域を身近に感じまちづくりの一員としての思いを持った。また，そこで出会った多くの方々が，学習を高めてくれる貴重な指導者となり，子どもたちにとって大きなエネルギーとなった。この出会いの一つ一つが安全を守るために働く人々の願いや工夫を知るきっかけになった。

また，インタビュー，アンケートなど，様々な活動を通して，自分の思いや考えを確実なものとすることができた。そして，いろいろな立場の人と接し，学校だけでなく現実の社会とのつながりを持ったことで，対象・他者との対話をすることができた。そして，自分の考えを吟味することができ，地域社会に対する誇りと愛情を持とうとする変容が見られた。単元を通し個人の振り返りカード，作文等の活用により，他者との見方・考え方の違いや自分自身の見方・考え方の変容にも気づくことができ，三位一体の対話がうまれた。

３．研究の展望

ひとり学習と全体学習を交互に取り入れる社会科学習を，より充実させるための重要なポイントとして次の３点が考えられる。今後の研究の視点としたい。

（１） 学習単元の開発と充実，学習課題とのかかわり

子どもたちが興味・関心をもつような活動や調査見学を取り入れた単元計画が必要である。また，他の友だちとの学びの交流を考慮した学習課題が大切である。学習課題とは，子どもたちの問題意識からスタートし，“相互の刺激”をしあう中で深化，発展していくものである。学習課題と出合ったとき，子どもたちは様々な疑問をもちながら追究をはじめる。問題解決への追究の見通しがもてる切実感のある学習課題でなければならない。

（２） ひとり学習における子どもの変容

学習課題と積極的にかかわっていくと，ひとり学習の問題意識が深まっていく。指導者は一人一人のみとりと支援が特に重要になってくる。ノートや作文，発言から個々の学びをみとり，子どもたちの変容を把握しながら単元構成にいかしていきたいと考えている。個に応じた支援をすることで，子どもたちが調べてきた様々な考えをつなぎ，つむぎながら全体学習をつくっていく。

（３） 対話学習の構築

ひとり学習で調べてきたことや考えてきたことを全体学習で他者と対話させる中で，一人一人の学びの質を高めることができる。対話学習では，ともに学び，練り合う場面を特に大切にしたいと考えている。

４．研究の評価

自分の思いや考え方の根拠となる資料等を，ひとり学習でみとるとともにその変容を把握する。様々な活動におけるノートや作文等で，個々の学びをみとり評価する。全体学習では，話し合い活動を通して，対話の深まり方を探り，評価する。子ども自身が学習を振り返る作文で，公正かつ総合的に判断する力が育っているかを評価する。

単元の導入と終末には作文を書いて，自ら変容を意識し，確かめるようにしている。また，学びの足跡を掲示したもので確認したり，個々でファイリングしたりすることで，新たな課題を見つけて学びを深めている。